

演出型

卓上に“季節”を飾るしつらい囲炉裏

小間技江さん(神奈川県)

築七〇年という歴史ある民家調の住まい、小間邸。二年前のリフォームを機に木工作家の馬場健二さんの三角形のテーブル囲炉裏を取り入れた。馬場さんのテーブル囲炉裏は通常移動できるタイプですが、「古材を生かしたい」という主人の要望から、リビングの中心となる柱をテーブルの脚に利用して、テーブルを固定しました。

小間さんのお宅ではこのテーブル囲炉裏を使って、四季折々のしつらいを楽しんでいます。春は野の花の寄せ植えを置き、夏は竹でできた蓋をして夏のしつらいを、秋は裏山で採れる栗や柿などの山の幸を飾り、冬はもちろんだき火をおこして囲炉裏として使っています。小間さんの囲炉裏づかいは、まるで床の間がテーブルの中心に存在しているかのようにとても洒落た使いこなしています。奥さまの趣味である山野草の寄せ植えや相食器のコレクションが、馬場さんの生み出した独創的な三角形のテーブル囲炉裏と相まって、しつらいのバリエーションの幅を広げています。囲炉裏を床の間に見立て、そこに季節の風物詩を飾らえる。というこれまでにないまったく新しい発想は、私たちの目にとっても新鮮に映ります。

テーブル囲炉裏を床の間に見立て、四季折々の演出を楽しむ

春のしつらい、奥さまの趣味である山野草の寄せ植えをしつらえた。山野草がテーブルから生えいるかのような自然な演出に、灰に、木製の枡をかぶせ、そこに寄せ植えが置かれています。松や柿などの枝ものを飾ることも



夏のしつらい、馬場さん特製の竹の蓋は夏のしさを表現するにはぴったりの小道具。夏はガラス器と庭育てている鉄線や蔓性の花を組み合わせたりして、涼しさを演出を心がけています。とは奥さまの技江さん。



秋のしつらい、裏山で採れる栗や柿などの山の幸をテーブルに飾らう。自然さびを生かした鉄の蓋がテーブルの秋らしさを引き立てている。秋の夜長に生の音を聞きながら、眺めを楽しむのはこの上ない贅沢。



冬のしつらい、特別なしつらいをしても囲炉裏の火があれば、火を眺める贅沢を味わえ、それだけ十分なしつらいになる。ほつと燃える炭の火を囲みながら、アフタヌーンティーを楽しむ。心温まる気持もほつと。



囲炉裏の手入れについて馬場さんに伺うと、「使い終わったら、早めに炭を消窓に移し、鉄部分はフライパンと同様、すぐに軽く掃除を」とのこと。固く絞った濡れ雑巾で拭き取るだけでいい。



自在鉤もテーブルと一体化している。吊るすものに応じて長くしたり短くしたり調節でき、とても使い勝ってよくつくられている。鉄の加工は馬場さんが友人の鉄作家に依頼している。



「炭は備長炭と普通の炭を混ぜて使います。こうすると火つきがよく、しかも一定の温度に保てるんです」と奥さま。

「今度は、ガラス作家と新しい試みをしようと考えています。例えば、囲炉裏がワインクーラーになったら便利ですよ」とはこの囲炉裏をつくった木工作家の馬場健二さん。こうして次々と新しいアイデアが生み出される。

